

2015.2.15 年間第六主日

## 重い皮膚病を患っている人をいやす

マルコによる福音 1:40-45

(そのとき、) 重い皮膚病を患っている人が、イエスのところに来てひざまずいて願い、「御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と言った。イエスが深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい。清くなれ」と言われると、たちまち重い皮膚病は去り、その人は清くなった。イエスはすぐにその人を立ち去らせようとし、厳しく注意して、言われた。「だれにも、何も話さないように気をつけなさい。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めたものを清めのために献げて、人々に証明しなさい。」しかし、彼はそこを立ち去ると、大いにこの出来事を人々に告げ、言い広め始めた。それで、イエスはもはや公然と町に入ることができず、町の外の人のない所におられた。それでも、人々は四方からイエスのところに集まって来た。

### 説教

病いは治るもの、と思っている時代に病気との関係で信仰を保つことは難しくなっています。それは、信仰による救い=信仰による癒し(病気治し)とはなかなか考えづらい現状があるということです。

でも、治らない病気もある、これもまた事実です。このことを合理的に受け入れると、治る病気は専門家のいうとおりにする、処方どおりに服薬する、あるいは外科手術をする、でも不治の病ならば祈る、こうなってしまいます。これを逆からみると(つまり非合理)信仰によって、信仰だけで病気を治そう、つまり医者にかからない、薬をのまない、外科手術をしない、輸血を拒否する、極端なはなしですが、このような態度の信仰者は原理主義者とか邪教徒とか非難されます。たいていのヒトは医者にかかる、それでも治らないと祈る、キリスト教信者に限らずだいたいこんな傾向があるのではないでしょう

か。

わたしのいとこの話ですが、ある日彼が歩いていると頭になにか落ちてきた、なにかなとおもい確かめると鳥の糞だった。彼はこの出来事についていないな、とは考えず運（うん）がついたと考え、すぐに宝くじを買いました。そのくじは見事に的中して100万円を手にいれ、彼の家族は豪華な旅行に行きました。この小話ではめでたしめでたしとなるのですが、これがもし高額の当たりくじ（前後賞合わせて7億円）を引いたとするとどうなるか。噂話でよく聞くのはいままでみた事も聞いたこともなかった親戚が大挙現れ押し寄せた、友達を失った、一家が離散した、はたまた不幸な犯罪被害者になったというような話です。こうなってしまうとといった高額当選がよかったのか、わるかったのか、わかりません。

さて、きょうの福音では重い皮膚病患者（ハンセン病=いわゆるライ病患者）がイエスのもとにやってきた。彼はひれふし清くして（治して）欲しいと願い、イエスが治した。そしてこのことは誰にも言わずに祭司に告げなさい、と厳しく諫めた。しかし、彼はイエスの言いつけに背きこの出来事をいいふらした、とあります。癒された重い皮膚病患者にとって、よかったことか悪いことかといえば、良かったことになります。信仰によって救いを得た人、彼はわたしたち信仰者としての良き先達になります。ただ、この一件でイエスは「もはや公然と町に入ることができず・・・」と記録されています。ところでイエスにとってはこの癒しの一件はよかったのでしょうか、それとも悪かったのでしょうか。

<もう一人の「静かな」重い皮膚病患者>

福音書には書いていないので、横道にそれるかもしれないのですがちょっと想像してみてください。この癒しの場面に「静かな」重い皮膚病患者がもう一人いたとします。彼はこの出来事の一部始終を見ていました。そして実際の癒しが行われたにもかかわらず、自分から名乗り出ることなく、黙ったまま、静かにしていた。そして、そのままその場を立ち去った、このようにイメージしてみてください。（心理

テストをしている訳で読み飛ばしてけっこうですが、この静かな患者を信仰深い人と信仰の薄い人、このように大雑把にふたつに分けてイメージできるでしょう)

イエスは人々を苦しみから解放しようとされました。しかし、最後にはご自分の身に降りかかってくる苦しみを受け入れました。病気や苦しみににはこの両面があるのではないのでしょうか？それは、苦しみから解放する、苦しみを受け入れる。つまり「救い」と「受容」の両面です。

地上に生きたイエスにとって大切なことは神とのつながり、人とのつながりを生き抜くことでした。救いを分かち合うこと、そして苦しみをも分かち合うこと、これはまたイエスに倣うわたしたちにとっても同じことです。

-----